

愚考考古学 ⑨

昔、炭は何故心要だったか？

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

昨今、炭火の炉辺焼や焼鳥屋が繁昌している。

確かに炭火で焼いたものはうまいが、昔の人々がそのために炭を焼いたとは考えられない。

平成二年二月から三月にかけて、大分合同新聞県南版

に「真名長者物語」芦刈政治著が連続掲載された。

これは、この地方の人に知られている炭焼小五郎の物

語であって、話の要点だけをかいつまんで述べれば、村

の貧しい炭焼の若者小五郎の所へ、大和国三輪大明神の

お告げがあり、京都大内より玉津姫というお姫様が来て

その姫と夫婦になった。そのとき、姫が持参した黄金を

小五郎はそれが貴重なものであることを知らず、鴨を捕

ろうとして小石がわりにそれを投げてしまう。

この話を聞いて驚いた姫は、黄金が貴重な宝物である

ことを小五郎に教える。

この話を聞いた小五郎は少しも驚かず、これと同じものなら自分の炭焼小屋の周辺や、鴨のいる淵の中に幾らでもあると言って、二人でそれを拾い集めて長者になったという物語である。

聞けば、このような物語は、全国いたる所に幾つもあるということである。

この話を読んで私が考えたのは、大昔、何故、炭が必要だったのだろうかという問題である。昔の人の日常生活を思う時、毎日の生活の中に特に炭が必要であったとは思えないのである。

古代人は、石器から金・銅器、そして鉄器へと、生活の中から知識を広げ、文化を発展させてきた。石や金の時代には熔解という作業は必要ではなかったかもしれないが、銅や鉄に至っては、熔解という作業を通

さなければ、産出・加工という仕事は出来ない。

その熔解という作業には、高い熱が必要である。今日のように発達したコークス炉や電気炉がなかった時代のことだから、高い熱を作り出す工夫がされ、その結果として、木を燃やすほか方法がなかったのではないかと思われてくる。

しかし、金属の熔解にどれくらいの温度が必要なのか調べてみると、金は一〇六三度、銀は九六〇度、銅一〇八三度、鉄一五三五度となっている。これに対し、木を燃やして作る温度は、せいぜい七〇〇度から八〇〇度程度だったと思われる。

そこで浮かぶのは石炭だが、この石炭の利用は、炭より後であり、その頃、至る所にあった砂鉄を鉄に加工するには、炭は石炭と同等の価値を持っていたのだろうと考えられていたのだろう。

では、いま鉄一〇〇キログラムを産出するとした場合そのための熔解用の炭はどのくらい必要だったのだろうか。恐らく炭の何倍、いや、何十倍の量が必要としたのではあるまいか。そうすると、海辺で砂鉄一〇〇キログラムを採取し、山辺で炭一〇〇〇キログラムを産出し

たとしたら、砂鉄を炭の産地に運んだ方が得策である。

そこで、炭焼竈付近に黄金が散らばっていたと仮定した場合、それは、鉱石等の熔解したあとの産物と考えられるのではないだろうか。こう考えてみると、炭焼は当時のハイテク技術が必要だったかもしれない。従って、炭焼小五郎は、当時の科学者・技術者であったということになる。炭焼が可能であった地域に似たような伝説があつて当然と言えよう。

このようなハイテク技術者を、部族集団が見逃がすはずはない。三輪には、出雲と同様に大部族がいて、当時畿内を支配していたことははっきりしている。この部族が、銅器から鉄器時代へと変わる時、白杵・三重方面に炭の産出されていることを知り、三輪明神のお告げとして、はじめに述べたように、政略的に玉津姫を遣わしたのではないだろうか。貨幣のない時代の部族間の交流は女であったことは明白である。

次に白杵の伝説、三重の蓮城寺との関連性についてだが、蓮城寺の創建者・蓮城法師は、東支那海を越えて渡来したとのいわれがあることから、彼が渡来人とすれば炭を焼く技術（鉄の製産も含む）を持っていたであろう

こともわかるような気がする。

それから、真名長者物語に宇佐八幡が出てくるが、これも、宇佐八幡には、銅鏡等を生産して奉納する香春地方の技術集団がいたことがはっきりしており、従って、当時の技術者達も、現代の技術者達が常に情報交換をしているように、技術の交流が行われていただろうと思う。

また、砂鉄生産と炭の関係ははっきりしているが、炭による高温度の発生には、送風装置（フイゴ等）が必要であり、フイゴの最上なものは狸の皮であると文献に記載されているが、その型などについてはわからない。

以上、私の述べたことは、大々的をはずしているかもしれないが、この近辺が、現在も炭の産地であることから、何か、かゝわりあいがあるかと思う、書いた次第である。

文献によれば、わが国では、銅の産出は和同元年（七〇八年）、金は天平廿一年（七四九年）とあり、砂鉄製法が開発されたのも前後した時代と思われる。とりわけ高温を作り出す方法は、まずは良質の炭を焼くことから始まったことはいままでもないことである。

先日、蒲江町元猿に行ったら、昔、六丁櫓で使用されていたと思われる古い古い型の木造漁船が、七、八隻放置された状態にあった。このまま放置すれば、あと数年で朽ちてしまうだろうと思った。

なんとか完全に保存できないものだろうか？。

